

自分ならではの 新領域を拓く

井上 真（いのうえ・まこと）

東京大学大学院農学生命科学研究科・教授



地域研究者の軌跡

① 生年・出身地……一九六〇年、山梨県

② 専門分野・地域……カリマンタン地域研究、森林社会学・ガバナンス論

③ 学歴……東京大学農学部（林学科）

④ 職歴……国立林業試験場の研究員（二二歳、四年間）、インドネシア教育文化省熱帯降雨林研究センターの研究員（二六歳、三年間）、森林総合研究所の研究員（二九歳、一年間）、東京大学農学部の助手（三〇歳、五年間）、東京大学農学部の助教授（三五歳、九年間）、東京大学大学院の教授（四四歳、八年目）

⑤ 現地滞在経験……長期滞在はインドネシア・東カリマンタン（二六歳、三年間、JICA長期派遣専門家）のみ

⑥ 研究方法……フィールドでの滞在期間が限られているのが痛いところではあるが、私自身の研究はフィールドで始ま

りフィールドで終わるものだと思っている。フィールドでは、参与観察、インフォーマル・インタビュー、調査票調査、グループ・ディスカッションなど何でも活用する。

⑦ 所属学会……日本森林学会、熱帯生態学会、環境社会学会、環境経済・政策学会、国際開発学会、ほか

⑧ 研究上の画期……一九九二年にブラジルのリオで開催された「国連地球サミット」。この会議以降は、小さなひとつの地域の実態に基づく政策提言を、生物多様性条約や気候変動枠組み条約の場にインプットする可能性が開かれた。つまり、地域研究の成果を国際条約の形成過程に活かし、「地域」を阻害しがちな「国家」を上下から挟み込む戦略を夢見ることが可能となった。

⑨ 推薦図書……高谷好一『多文明世界の構図——超近代の基本的論理を考える』（中公新書、一九九七年）

メッセージ

(地域) 研究者になること

私は学部卒で林業試験場の研究員になった当初から、熱帯林消失の原因を探る研究をしたかった。そして、運良くカリマンタンで三年間のフィールドワークを実施することができた。林学という実学出身であり、しかも学部卒だったので、研究手法には無頓着だった。最初から関連する諸分野の学問を活用しつつ、自分なりの世界を創ることを心がけた。カリマンタンでの三年間のフィールドワークを終えて博士論文を仕上げた頃に、自分のやったことが地域研究に含まれるという自覚を持つようになった。それ以来、学生たちにも総合格闘技のメタファーを用いて、「手法が先にあるべき」の研究を排し、最初から「本格的な地域研究」を目指すことの意義と考え方を説いてきた。

第1部「現場の悩み三〇問」を読んで

06 「就職するまではディシプリン型、就職してから本格的な地域研究？」に関連し、大学教員が注意すべき点があるのではないかと。私自身も「本格的な地域研究」を学生に勧めているが、ディシプリン重視の学会誌に学生が論文を投稿することもある。これは、独自の立ち位置を「重心」とする「本格的な地域研究」の領域（円／土俵）を自分なりに創成しつつも、その一部が複数の既存学問分野（円／土俵）

と重なっているからである。そのような既存学問分野の手法を学び論文を投稿することは、他流試合として腕を磨くことになり「本格的な地域研究」を展開するうえで有効に作用する。そればかりでなく、論文という成果を産出することとは、プロの研究・教育者を目指す学生にとっては現実的な重要性を持つ。博士論文が投稿論文三編分の内容を持つものだとするならば、三編ともディシプリン重視の学会誌に投稿してもよいし、三編ともディシプリン重視の学会誌に投稿してもよいはずである。重要なのは、既存分野の枠内（土俵内）に研究全体の「重心」を置くのではなく、独自の「重心」を構想し創成する意志を持つことなのである。蛇足ではあるが、新領域の創成を目指して果敢に挑戦すべきなのは、身分がすでに確保されているという点でいうと、むしろ大学教員である点を忘れてはいけないうらう。

地域研究の魅力と可能性

フィールドにどっぷり浸かりつつも、世界の動向にアンテナを張り、マクロな状況のなかに自分のフィールドを位置づけ、「地域おたく」や「趣味的研究」といった揶揄に對し自分なりの回答を見いだせば、自信をもって地域研究に取り組むことができよう。自分ならではの新たな領域を拓く地域研究は、アカデミズムと実践との架け橋という意味でも、わくわくするほど面白く、また刺激的なのである。